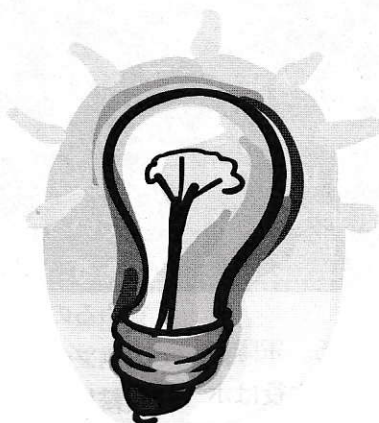


■おきなわ環境ネット■

沖縄環境ネットワーク通信 25 号

Where is the light of peace?



特集／平和憲法とエコツーリズムの国・コスタリカを訪ねる

今回の訪問について

… 桜井 国俊

沖縄からコスタリカへ -平和憲法とエコツーリズムの旅-
ツアー日誌 (1)

… 内海 正三

コスタリカから見えるもの

… 山口 洋子

小さな国の大きな挑戦 ～コスタリカに学ぶ「循環する教育」～

… 寺田 麗子

コスタリカのファンになってしまった

… 内海 恵美子

ポロの木と少女

… 照屋 久子

コスタリカ そして オキナワ

… 長谷川 生里

世界市民が世界を変えるとき

… 砂川 かおり

～世界社会フォーラムに参加して～

アメリカで「ジュゴン訴訟」が始まった

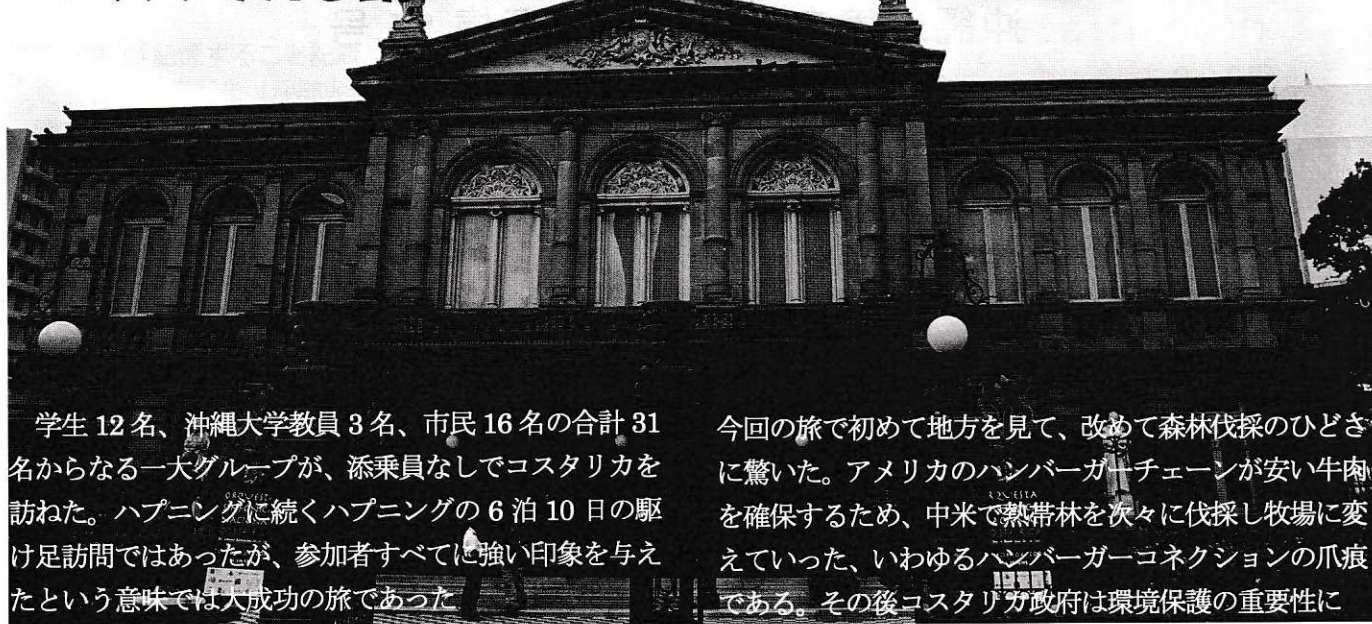
… 真喜志 好一

エコネット

《環境情報おきなわ》

～特集～

平和憲法と エコツーリズムの国 コスタリカを訪ねる



学生 12 名、沖縄大学教員 3 名、市民 16 名の合計 31 名からなる一大グループが、添乗員なしでコスタリカを訪ねた。ハプニングに続くハプニングの 6 泊 10 日の駆け足訪問ではあったが、参加者すべてに強い印象を与えたという意味では大成功の旅であった。

話は 2 年近く前の 2002 年の秋にさかのぼる。軍隊を廃棄した現行 1949 年コスタリカ憲法制定の主役はホセ・フィゲーレス元大統領だが、未亡人のカレン・オルセンさんが沖縄に来て平和について熱く語ったのがことの発端だ。たまたま私が 2003 年 3 月にコスタリカを JICA の仕事で訪れたことから、彼女の話に感激しコスタリカをぜひ訪ねたいと願っていた沖縄の市民が、訪問を企画して欲しいと依頼してきたのである。

そこで訪問時期としては乾季の 2004 年 3 月を選び、事前に 3 回の学習会を開催して準備に努めた。また学生も訪れることから、安い航空券やホテルを手配するとともに、学生に対して資金助成も行った。20 年来の友人のビクトル（ホセ・フィゲーレス元大統領の息子のホセ・マリア・フィゲーレス前大統領の下で環境大臣を務める）が奥さんのアナとともに、カレン・オルセンさんとの会見をセットしてくれた。また JICA の研修コースでの私の教え子で、公共教育省の環境教育担当官のセシリアが国連平和大学と現代教育学院（私立の小学校）への訪問をアレンジしてくれた。エコツアーのアレンジは、現地の日系旅行社のサクラ・ツーリストの下村昌也さんに依頼した。全行程に下村さんと高橋愛子さんがガイドとしてつき、懇切丁寧な案内を受けた。こうした多くの人々の協力のもとに、短い充実した旅をすることが出来た。

私にとっては多分 5 回目のコスタリカ訪問だが、今までの旅は仕事の旅で、首都のサンホセ周辺しか知らない。

今回の旅で初めて地方を見て、改めて森林伐採のひどさに驚いた。アメリカのハンバーガーチェーンが安い牛肉を確保するため、中米で熱帯林を次々に伐採し牧場に変えていった、いわゆるハンバーガーゴネクションの爪痕である。その後コスタリカ政府は環境保護の重要性に覚めるのだが、傷跡が癒えるのはまだまだ先だ。しかし、エコツーリズム発祥の地といわれるモンテベルデの熱帯雲霧林の素晴らしさには感動した。特に感心したのはガイドの専門性の高さだ。沖縄のエコツーリズムも、質の高いガイドを養成しないと顧客満足度を高めることは出来ない。

また、現代教育学院でみた子供たちの個性・自発性・積極性にも感心した。沖縄の基地問題・環境問題について簡単な講演をしたのだが、講演の最中に次々と子供たちの手が挙がって質問につぐ質問となる。まず何にも疑問を持ち、質問する。ついで疑問を持ったら自ら体を動かして調べる。さらに調べた結果にもとづいて考察する。この三段階が普段の教育の中で徹底している。教師からの一方通行の教育ではなく、子供たちの自ら学ぶ姿勢を育成する教育である。また平和教育の実際を見学する機会はなかったが、資料はたくさん貰ってきた。日本や沖縄の被害者体験、加害者体験をベースとした平和教育とは異なり、身近な紛争をどう管理するかということから始まる実践的な平和教育である。彼らには、そもそも被害者体験も加害者体験もないのである。日本の平和教育が形骸化し、活力を失っている現在、コスタリカの平和教育から活力を分けてもらう必要がある。その目的を絞った調査団を送る意義もあると実感した旅だった。

（桜井国俊・沖縄環境ネットワーク世話人、訪問団団長）

沖縄からコスタリカへ — 平和憲法とエコツーリズムの旅 —

◇ ツアー日誌 (1) ◇

内海 正三 (沖縄環境ネットワーク世話人)

極彩色のパラダイス

世界でたった一つ、軍隊を持たない国がある。エコツアーもその国で始まったそうである。ぜひ、その国を訪問し、何故そのような事が可能なのか、自分たちの目で確認したい。

その国には、手塚治虫の「火の鳥」のモデルになった美しい鳥と、蝶のように花の蜜を吸うハチドリも棲んでいる。中米コスタリカ。極彩色のパラダイス。

3月16日午後6時、那覇空港の国際線ターミナルの待ち合わせから、今回のコスタリカツアーは始まった。空港から車で10分のところに事務所兼自宅を構えている我々夫婦が、31名のツアーの28番目と29番目の遅い到着である。

そもそもこのツアーの言い出し人である糸数慶子県議員は、県議会の小委員会の議決がその時期に重なり、ツアーへの参加を見合わせた。コスタリカツアーでは、自然環境を保全することにより地域振興を成し遂げた実例を学ぶことを楽しみにされていたが、県議員選挙が今年あるため議事日程が変更になり、参加できなくなった。

また、団長として参加する予定だった池宮城弁護士も、バス会社の従業員全員解雇通知への対応に追われ、最終段階で断念となった。池宮城弁護士は、私たち夫婦とは30年間自然保護運動を共に戦い、白保のサンゴ礁保全運動では機動隊に不当逮捕された経歴の持ち主である。池宮城弁護士は、空港まで見送りに見え、幻の団長挨拶で残念な思いを吐露されていた。

あと一人、スリランカ出身の沖縄大学教授・チャンドラールさんは、内紛のある国内状況がコスタリカから敬遠され、滞在許可証が下りなかったために無念の不参加となった。

事前学習の時に米国では荷物検査が厳しく、鍵を掛けていると壊されると旅行社から説明があったが、鍵を掛けている人もいた。鍵を掛けないと不用心で、荷物が盗まれるといわれ、悩んだ挙句掛けた。預けた後で旅行社から再び説明があり、あわてて預けた荷物の鍵をはずした。あまり学習会の内容が自覚されていない(反省)。

手荷物検査と身体検査を終え、待合室に移ると丁度アテネオリンピックのサッカー予選で日本代表とレバノン代表がテレビに放映されていた。30分ほど時間待ちの間観戦し、日本代表が安部のフリーキックで先取点を挙げたところで機内の人となった。

10日間日本を空けている間に、いろんな変化があるのだろうと考えた。

日付変更線を超えて

中華航空で那覇から台北に飛び、そこでロサンジェルスに向かい、ユナイテッドアメリカ航空に乗り換えて、コスタリカのサンホセに向かう。台北までは1時間30分の近距離である。夕食が機内食のサンドイッチのみでは我慢できないので、空港でパンを買い置いた。

あっという間に台北空港に到着し、あまりの広さに道を間違ひ、乗り換え便への待ち合わせ場所にも遅く着いた。先行き心配である。

乗り換え便への待ち時間が2時間半あるので、今回のメンバーの一人・伊波義安さんが三線を弾き、女性陣が琉舞「かじやで風」を踊りだした。コスタリカでの交流会への出し物の練習が台北空港で始まった。和気藹々とした雰囲気である。



出発直前まで仕事をしていたので、コスタリカの人々へのお土産を準備してなくて、他のメンバーが子供たちへの贈り物を用意しているのを聞きあせった。待ち時間が残り少なくなって搭乗時間が心配だが、空港内のみやげ物を妻のエミが見に行ったら。実際には化粧品が多く、適当な土産が無かったので30分ほどで何も買わずに帰ってきた。その直後に搭乗が始まり、冷や汗をかいた。ロサンジェルス行きの飛行機はものの10分ほどで飛び立ち、もう少しで置いてきぼりに会うところだった(またまた反省)。

夫婦でツアーに参加しているのに、席は離れ離れだった。妻の側の米国人が、友人の所に移動したので、空いた席に私が移った。11時間15分の長いフライトで、数時間おきに飲み物や食事が運ばれてきて、席に座ったまま栄養だけを取り続けるフォアグラ状態である。

フライトアテンダントが片言の日本語でオーダーを確認するが、チャイニーズランチとおかゆの区別が無く、私た

ちの列はオーダーに関係なくすべておかゆになった。
全席禁煙であるが何度も中国タバコを売りに来て、トイレも禁煙だが灰皿が備え付けられている。もっともタバコを吸う人はいない。

アメリカに入国する際に必要な2枚の書類を記入し、同じ2枚を帰路に提出するため取っておく。植物検疫や通貨持ち込み量の確認であるが、全てNOと記入すれば簡単に入国審査を通過できるという声もあった。私には初めての海外旅行で、すべてが初体験である。妻は何回も海外旅行を経験しているので、落ち着いている。

10時間を経過した頃、団長の桜井さんがフライトアテンダントの所に行くのが見えた。しばらく立ち話をしていたが、席に戻り際に、先ほど機長のアナウンスでサンフランシスコへ到着すると言っていたので、サンホセへの乗り換えに間に合うのか確認に行ったとのこと。さすがに責任者は、機長のアナウンスにも気を配っているのだと感心した。後ほど霧でロサンジェルスには降りられないので、天候が回復するまでサンフランシスコに臨時着陸するとの説明があった。

映画「ダイ・ハード」では、飛行機は空港の上を旋回しながら降りられる条件を待つのだが、現実にはサンフランシスコ空港での待機となった。夕刻のサンフランシスコ上空はそれなりに綺麗だが、東に向かって飛んでいたのが夕刻から一気に宵闇に変化した。海の中を長いハイウエーが突っ切る街路灯は、輝く真珠の首飾りのようで空から見て美しかった。



飛行機はサンフランシスコに着いたが、一歩も機外に出ないで天候の回復を待った。意味の分からない中国語放送の機内テレビに合わせて、対談の笑っている場面でこちらも笑って過ごしたが1分で飽きてしまった。

1時間ほどして、5分間だけPCを使用してよいとの放送があったので、この報告を書いている。本当に5分したら止めるように言われた。

しばらくすると、座席シート装着の指示があり、離陸した。1時間ほどでロサンジェルス上空に達したが、飛行機の下が淡い青やピンクの雲が浮遊している。どうやら未だ霧

がかかっているようである。一旦下降して家屋が身近に見える所まで近づいたが、再度上昇した。様子を見て再度トライするようである。

私の横と前は米兵で、その一人の兵士の妻が飛行場まで迎えに来ているようで、先ほどの5分間に携帯で連絡を取っていた。着陸が遅れているので心配しているようだった。しかし、2度目の旋回時は、より一層霧が濃くなっており、下降しても飛行場の信号がはっきりとは見えない状況に、米兵たちも緊張していた。我々もここでサンフランシスコに引き返したら、乗り継ぎの飛行機には間に合わなくなるので、何とか着陸をして欲しいと思っていた。窓の外の景色も見えず、徐々に下降を繰り返し、ついには接地の衝撃が来た。すぐに振動も収まり、米兵たちは思わず拍手をしていた。こんな所でスリルを味わうとは思わなかった。

早くも非常事態

しかし、サンフランシスコに一時寄港したため、乗り継ぎのユナイテッドアメリカ航空への移動の時間が既になくなっていった。ロサンジェルスに22時55分に出発する予定が、我々が飛行場に到着した時刻がその30分前で、搭乗受付では既にキャンセル待ちの乗客を機内に案内していた。

単なる乗り継ぎでもアメリカの今の状況を反映して、荷物チェックや金属探知機による検査も厳密を極め、非常に時間がかかった。入国審査は一人づつ係官と対応するので、英語の達者でない者は余計に手間隙がかかった。

出発時の旅行社の説明では、荷物は直接サンホセまで届くはずであったが、実際にはロサンジェルスで各自一旦荷物を受け取り、改めて別の建物まで階段やエレベーターを乗り降りしてバスで移動してユナイテッドアメリカ航空の受付に行った。中華航空は、日本航空に比べてロサンジェルス空港での対応のランクが低く、離発着ターミナルも空港の外れにあるそうだ。

29名もの大人数ではエレベーターも2班に分かれざるを得ず、前半のグループに付いた係りの空港の女性担当者は、既に時間オーバーであることが判っているので、ドンドン先に急ぐ。後ろのグループに付いていた男性担当者は、エレベーターまでしか案内せず、別の棟に有るユナイテッドアメリカへのターミナルバスでの移動がメンバーに分からず、ユナイテッドアメリカの受付に到着するのに余計に時間が掛かった。

前半のグループが受付で手続きをしようとしたら、既に手遅れで乗れないとの事だった。前半のグループを引率していた女性担当官に、ネイティブスピーカーであるメンバーのヒギンズさんを加えて交渉を行ったが、なかなか状況は改善せず、加えて後半のグループが到着しないために、こちら側の姿勢も決められない有様であった。シカゴ経由とダラス経由で別れてサンホセに移動する案や、本日はロサンジェルスで一泊し、翌日の同じ飛行機を手配する案とか(それも満席で乗れる可能性は低いといわれた)、どれも

大変な事態であった。そうこうする内に後半のメンバーと桜井さんが到着し、改めて交渉を続けた。

同じ時刻にロサンジェルスで合流する緒方さんと砂川さんは、本隊が到着しないので事態究明を旅行会社に電話要請していた。事故の可能性もあるからと強行に要請し、キャンセル待ちの搭乗が始まって約 30 名の空席を確認し、乗務員にメンバーが到着まで待つように依頼していた。機長も出発時間を 50 分経過しても、我々を待って飛行機を移動しないでくれた。既に搭乗している乗客からフライトアテンダントに早く出発しろと抗議もあったようだが、待機してくれた。その結果、飛行機がゲートにいたことが受付に伝わり、急遽発券することになった。

またそこから駆け足でコスタリカへの出国審査を経て、荷物検査や金属探知機によるチェックを通り、やっと予定通りの飛行機に搭乗できた。

笑い話のようだが、爪きり用のおもちゃのようなはさみを取り出したり、ベルトの金属が反応するからと外した上で片足立ちさせたり、ほんの少しの小銭も取り出したりと、後で考えると滑稽なまでの反応であった。

乗り込むまで多くのメンバーは、時間も過ぎているので、てっきり別の飛行機だと考えていた。機内に入ると緒方さんと砂川さんが待ち受けているので逆に驚き、私は、なぜこの飛行機に 2 人は乗っているのかと尋ねた程である。

ラテンの世界は皆兄弟

予定よりもかなり出発を遅らせたことに不満のフライトアテンダントの一人は、我々が乗ってきた時から不機嫌を隠そうとせず、サンホセへの到着時間を尋ねても知らないと答えていた。しかし、一般の乗客は好意的で拍手で迎えてくれた。これで兎にも角にも 31 名の今回のツアーのメンバーが揃った。

私は最後尾から 2 番目の席で、伊波義安さんとハワイからの一般客ホセさんと一緒に座った。ホセさんは 60 歳ほどで、私が席に到着したときに、ひじ宛に腰掛けたポーズで迎え、笑顔でやっと着いたなと歓迎してくれた。小瓶のアルコール（テキーラか？）を既に飲んでおり、出される料理にも追加注文したその小瓶の液体をふりかけ食べていた。

10 歳まではコスタリカで育ったホセさんからは、パナマ運河建設時以来、中国人がコスタリカにも多いことや、日本人も 4 分の一は日本人であること、しかし、東洋人の顔は皆一緒に見えることなど、面白い話を聞かせてもらった。我々の遅れたことで不機嫌なフライトアテンダントにいろいろと話しかけ、嫌がられているように見えながらも最後は仲良くなっていた。

グアテマラに寄航して、一旦清掃と安全確認のため全員機外で待機した。数分の待機時間のはずが、30 分間待ち、再度搭乗した時に、そのフライトアテンダントからおやつの特典があった。にこりともしないで、お菓子好きのメンバーには 2 個渡す仕草が面白かった。

ホセさんは、アルコールのせいで徐々にスペイン語まじりの英語になり、いろいろ苦労したのでポルトガル語までできると、それも披露してもらった。付近に座っている人全てが、まるで昔からの友人のように交流するのは、沖縄と通じるラテン気質かと感じた。8 時間のロスからサンホセの夜間飛行で、おしゃべりのおかげで 3 時間ほどしか眠らなかった。途中立ち寄ったグアテマラでは、藤色の鮮やかな花を、大きく広がった枝いっばいに咲かせるジャカランダの雄姿がみごとだった。



グアテマラもサンホセも、雲間を切り裂くように飛行機が離着陸を行う。9000 メートル上空からの熱帯雨林の自然は深い緑に覆われ、雲海に頂上部を突き出している様子はまるで水墨画の風情である。

グアテマラからサンホセ間は、太平洋上を陸地から離れずに海岸線にそって南下する。日本と違って多くの自然環境が残されている様子が手に取るように分かる。ほとんどが森林で、道路や人家は上空からは見当たらない。

31 名の大所帯で団長の桜井さんは大忙しである。一人旅ならばじっと待っていれば済むことも、メンバーの不安を解決するため、その都度関係者に確認作業を行っている。桜井さんの負担を少しでも軽減しようと、グアテマラでの 30 分の待機時間に 5 班へのグループ分けと班長を決めた。実際はスペイン語ができるのは桜井さん 1 人という状況から、なかなか思惑通りには進まない可能性もある。ラテンアメリカに入って、ルーズと大らかさが、ロサンジェルスでのギスギスした対応に比べて救われる。

届かない荷物

そのアメリカでの最終的な処理がコスタリカに入ってから思わぬ障害となって現れた。フリージャーナリストの寺田麗子さんの預けた荷物がサンホセに到着しなかったのである。

前日にロサンジェルスで、最終的に搭乗できるという状況になった時、一人寺田麗子さんの荷物だけが準備を終わり、先に搬入された。2 人目以降が全然パスポートとチケットの確認作業が進まず、白人客数人の荷物の搬入が先になされた。我々の 2 人目以降の貨物はまとめて運び込

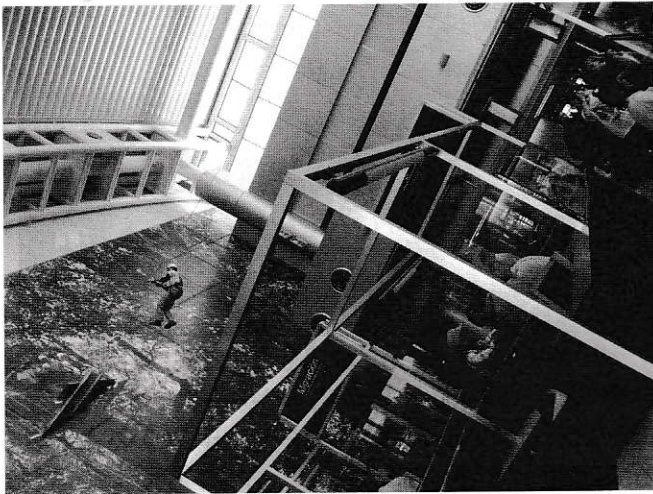
まれたが、最初の寺田さんの荷物が行方不明になった。取材用の撮影録音器具が一切入っており、仕事にならない状態である。

海外旅行では、よくある話で、50%は荷物が戻らないそうである。日用品は市内で購入できるが、撮影録音は手荷物にしたビデオで出来る範囲で行うしかない。

私ならばパニックになりかねないが、寺田さんは平然と、こういうこともあるわと構えている。

コスタリカは交通混雑

サンホセの空港は、いかにもエコツーリズムの発祥の地らしく、ロープ渡りで移動するキャノピーが立体的にデザインされており、一味違った印象を与える。



台北・サンフランシスコ・ロサンゼルス・グアテマラと移動してきた空港が、ほとんど建物の外へ出る機会が無く、久しぶりに外気にあたり日差しが強さと風の涼しさを同時に感じた。

熱帯地方であるが、高度が1000メートルを超えるので涼しい。ホテルへの送迎を依頼している旅行社のバスが、朝の交通渋滞に事故が重なり、小1時間送れて到着した。バスが走り始めて現地時間を確認したら午前9時37分であった。

サンホセ空港から、先に学生メンバーが宿泊するディプロマットホテルに1時間ほどで移動し、その後社会人メンバーが宿泊するプレジデントホテルまで送ってもらった。その道すがら案内の下村さんに、景色や植生及び若干の歴史を説明して頂いた。下村さんは在コスタリカ7年の日系人で、よく日本人観光客の案内をするベテランである。走り出してすぐに渋滞に巻き込まれ、片側2車線の幹線道路もぎっしりと車で埋まっている。この道はパンアメリカンハイウェイという、南北アメリカを縦貫する大陸の幹線道路である。実際は、パナマのジャングルで分断されており、そこはフェリーで車を移動するそうである。

ここまで全員がほぼ予定通り到着した安堵感から、28時間30分の長旅をしてきたメンバーとは思えぬほど、元気に車窓の景観を楽しんでいる。植生は沖縄との共通項の多さに思わず会話が盛り上がった。道路事情は信号機が少なく、

広い道を車の間をすり抜けるように人が横断をする。乗用車はほとんどが日本車で、大型トラック・トレーラーやバスはドイツ製が多い。後でガイドの説明で分かったが、鉄道が発達していないので、移動は自家用車が多い。中古車を修理して長期間利用しているので、耐久性がある日本車やドイツ車が多くなるようである。立派な日産の営業所があり、トヨタのレンタカーの営業所もある。空港から少し行く間にも、何台も事故や故障で停車しており、一層渋滞をひどくしている。午前10時をまわり、既に小中学校は始まっているが、スクールバスに生徒が乗った車によく出会う。サンホセの中心街に進むと、歩行者も多く活気がある。国立小児病院の前を通り中心街に向かう。

日常会話はスペイン語

各自宿泊ホテル近郊で適当に昼食を取り、午後1時半から半日観光ツアーに臨んだ。私は、ホテルの向かいの食堂で魚のランチを食べたが、英語が通じない。通貨も基本的にコロン（コロンブスから由来する）である。メニューの英語表記を見て指差して注文し、コロンの数値を450で割ってドルで支払った。ココナツジュースのような白い飲み物が出た。ほんのり甘くおいしい。コスタリカの人は背丈は日本人と変わらない。体軀は男女ともがっしりしている。

ホテルに戻ってロビーで待機していると、新たな問題が起こった。ロサンジェルスでのドタバタの影響で、ディプロマットホテルに入った学生たちのほとんどが、ドルを持っていないことが分かった。私も含めて社会人は、沖縄の銀行でドルに交換してきたが、学生は、滞在予定時間の長いロサンジェルスで交換する予定を組んでいた。しかし、完全な遅刻の中で、搭乗するだけで精一杯の状況ではそれもかなわなかった。できれば銀行で両替するのだが、円を扱っている銀行が少なく、一ヶ所円をドルに両替してくれる民間の業者では、数十%の手数料を取るそうである。

本日の午後の日程を確認すると予定の変更があった。翌日に予定していた元大統領夫人で、コスタリカ平和憲法の意義と日本の軍事化への警鐘のため沖縄にも来たことのあるカレン・オルセンさんとの交流会が、カレンさんの友人の女性が危篤状態に陥ったので、急遽明日には外国に見舞いに行くことになり、本日の夕方6時からに変更になった。

スペイン語ができる桜井さんに、ここで数時間の両替の時間を取ってもらう訳には行かないので、社会人が余裕のあるドルを個別に学生の円と交換してあげて凌ぐことになった。しかし、社会人もカード決済を考えていたので、それほどドルを持っている人はいなかった。私は、事業の最も忙しい3月に10日間も空けるので、お土産をいくつも配る必要があり、ドルを余分に持っていた。明日のコーヒー園の観光時にお土産を買えば、その時点で余裕資金を学生の持っている円と交換する約束をした。

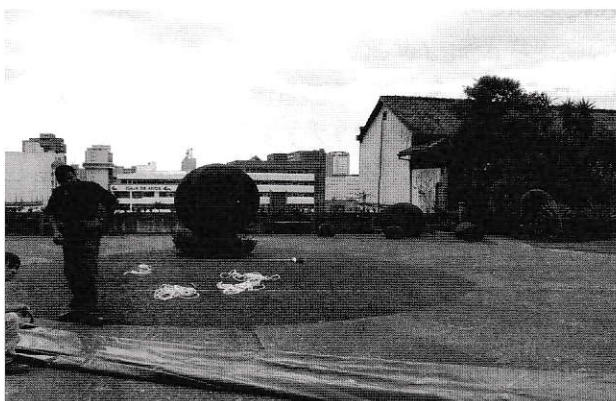
二人のガイド

ツアーには下村さんの外に高橋さんという女性がガイドとして付いた。彼女は父親が大阪出身で、母親がコスタリカ人の学生で、4回日本にも行き、日本人学校で教育を受けたので流暢な日本語を話す。

最初に国立劇場を訪れ、貧しかったコスタリカがコーヒーの栽培により豊かになっていった歴史を留める天井画や、当時イタリアから設計士を呼び寄せて作られたオペラ座を見学した。当時はコーヒーの栽培・収穫作業を、画家が理解していなくて、間違えた内容の天井画が出来上がり、観賞した人からの指摘で改めて正しいコーヒー農家の作業が、同じ部屋の別の天井や壁の上部に描かれている。説明を受けないと分からない、内容の違う作業が同じ部屋に描かれていて、何気なく通り過ぎていく。間違いをそれも美術として残す気風が面白い。

オペラ座は、重厚な設計で、現在も多くの用途に利用され、先日学校の発表会に使用されたそうである。1階客席の床は、1メートルほど持ち上げて、舞台と同じ高さまで人力で引き上げることができる構造になっているそうである。客席も立派で、一度ここでの公演を聴きたいと思わせる施設である。

その後、バスで国立博物館に移動した。博物館の壁は1948年の最後の市民戦争のときの銃弾跡が今も残されている。博物館に入ると、中庭の中央に大きな球体の石が据えられている。球体としては97%の正確さで磨かれた石は、千年以上も前に作られたそうである。技術も道具も限られた当時の中米で、何の目的でどのようにして作られたのか今もって謎の部分が多く、世界7不思議の1つとして「オパーズ」(未来からの遺産)と呼ばれている。



中庭には旧式の大砲や砲弾が置かれ、外壁の弾痕と併せて戦争の悲惨さを後世に残す役割を負っている。内部は中米の歴史が一覧できる構成になっており、ナウマン象や大アリクイの祖先が、たぶん人類に滅ばされた時代から、農耕生活に入り、メタテと呼ばれるタロイモを摩り下ろす道具の変遷。そしてメタテが道具から離れて祭祀のシンボルとして使われたであろう宝飾化の歴史が興味深い。

その後、徒歩で国会前を通り、ナオシナル広場にある独立記念塔を見学した。国会は質素で、説明を受けないと普通の建物で、国会とは思わない。写真マニアのヒギンズさ

んがいないのでガイドが探しにいった。

独立記念塔は、5人の女性に追われる男性の像で、1855年に中米5カ国を侵略した米国人ラファエル・ウォーカーが5カ国から追われる様を描写している。

カレン・オルセンさんとの再会

その後急いでホテルに戻り、シャワーを浴びて6時からのカレン・オルセンさんとの面談に臨んだ。当初はスペイン語と日本語の対訳で、意見交換や質疑も予定していたが、時間の制約があつて英語による対話になり、多くのメンバーにとっては沖縄を訪問していただいたカレンさんへの再会の喜びを表す場となり、内容的に平和憲法の意義や日本の進むべき道について討議できる条件にはなかった。それでも一人ひとりを抱きしめ、コスタリカ訪問を喜んで頂けたことは、また改めて頑張ろうとの意欲につながる契機となった。



インターネットで沖縄と連絡

初日で多くのハプニングもあり、私たち夫婦は夜に町へ出かけるのは控えて、この報告を書いている。夕食もホテルの一階のレストランで取った。夜の内にインターネットを接続し、年度末の会社の仕事で片付けられるものを済ませる。しかしインターネットも予想通りにはいかない。ダイヤルアップでコスタリカから繋がる設定を沖縄で行ってきた。ヤフーBBの国際ローミングサービスで、コスタリカのサンホセから通じるはずである。しかしホテルがダイヤルアップで繋げず、無線LAN方式になった。設定してくれるボーイは当然日本語表示のコンピュータは始めてである。

CD-ROMを入れ、設定を開設し、チップをパソコンに差し込んでOKのはずが繋がらない。電波が弱いのである。パソコンを持って廊下に出て天井のパネルをはずし、部屋への電波状態が良くなるように調整して始めてインターネットが繋がった。しかし、不思議なことにメールサービスに入れない。メールパスとメールアドレスは既に記憶させてあるので自動で記入されるのであるが、うまくいかない。1時間ほどいろいろ試して、最後にメールアドレスの一文字がなぜか抜けているのに気が付いた。やっと連絡が付き、終わったのは11時半であった。(以下次号)

コスタリカから見えるもの

山口洋子（沖縄環境ネットワーク会員）

コスタリカへ行ってきました。コスタリカは中米、ニカラグアとパナマに挟まれた、国土面積は九州と四国を合わせた位、人口 400 万人ほどの小さな国ですが、世界で日本とコスタリカだけが非武装の憲法を持っている事で知られています。

コスタリカの憲法では第 12 条で恒久的制度として軍隊は禁止すると決めています、必要なときには軍隊を持つ事も認めています。しかし 1949 年に憲法制定以来、一度もそのような事態になっていません。それに比べ、日本の憲法九条は「一切の軍隊を持たない」と規定していますが、今や世界有数の軍事大国になっているという大きな違いがあります。昨今の日本の現状は「専守防衛」の枠を超えてイラクへ派兵がまかり通り、一連の有事法制等どれも憲法違反であることは明白です。一方国民には北朝鮮の脅威とか、国際貢献とか軍隊が必要だという流れをつくって、今や改憲を容認する人が 7 割にものぼると報じられるような情勢を作ってきた。一体何がこの 2 つの国の違いを招いたのか、コスタリカへ行って一番知りたいことでした。

着いたその日、ホテルへ向かうバスの窓から見える立派な建物を指してガイドの方が、「これは国立の子供病院です。どんな子供も無料で治療が受けられます」と誇らし気に嬉しそうに説明されました。また憲法 78 条では国内総生産の 6% を下回らない予算を教育に当てると規定されていて、現在国家予算の約 30% が教育に当てられているそうです。「兵士の数ほど教師を」という方針が続けられ、今や識字率 97% ということです。

翌日、「国連平和大学」に案内して下さったのは、日本の文部科学省に当たる「公共教育省」で環境教育を担当されているセシリアさんという女性の方です。彼女の話の中でとても印象的だったのは、学校教育の中で「価値観の育成」という科目があり、その中で武力を使わない紛争解決の思考力・実践力の育成を目指し、対話によって問題は解決できるという価値観を共有する教育が行われているということ、平和と言うのは戦争がないことだけを意味するわけではなく、人間同士の調和だけではなく他の生物との調和（ハーモニー）を伴うことが必要だとおっしゃったことです。ここでは平和教育も環境教育も一つの事として考えられ、一緒に学ばれています。

また 6 日目に訪ねた「IEM（現代教育学院）」という私立の小学校では、子供たち自身がグループをつくり、疑問に思うことを調査して結果を報告すると言う、あくまでも自主的な教育がされていました。一例としていじめの問題では、いじめがあるのはなぜか、子供達が調べた結果では家

庭における環境が愛情や配慮不足の場合に子供がキレたりいじめになりやすいというものであったそうです。その解決策をまた考えるという、学校の中で対話による紛争解決の方法を学ぶのです。

またガイドさんの説明の中で、憲法 31 条に「コスタリカの領土は、政治的理由で迫害を受けている全ての人の避難所である。追放が法律上の命令で裁定された場合でも追放を受けた国への送還は認められない」とあるのを知りました。現在、100 万人近い難民を受け入れているそうです。日本の入管での非人間的な難民の扱いとの雲泥の差に思いをはせ、このような人間愛溢れる条文が憲法に入っていることにショックを受けました。中米は南米と共にアメリカの干渉を受け続けて紛争の絶えない地域です。その地でこれだけの事ができるのです。近隣諸国への平和外交そのものだと思います。

また大統領も国会議員も任期 4 年で再選は禁止されており（最近大統領は中 8 年置いたらもう一回立候補できるようになった）、独裁者を生まない、権力の腐敗が起きない仕組みになっているのです。4 年に 1 度の選挙の時はにぎやかなお祭り騒ぎで観光客が公正な選挙を見に来るとか。18 才未満の子供も模擬選挙に参加して選挙を学ぶ教育の一環になっているそうです。

結局あらゆるところに民主主義を浸透させる仕組みをつくり、民主的社会を進化・成熟させていることを実感しました。その大きな基になったのが、軍隊を捨てたことと、それを支持し続けてきた国民の力なのです。

「軍隊を捨てたから、平和な国になりました」

「平和は守るものではない、作り出すものです」

カレン・オルセンさん（フィゲ雷斯元大統領夫人）の言葉です。

最近、日本では東京の立川市で自衛隊の官舎に「イラク派兵に反対しましょう」というチラシを配っただけで 3 人の人が逮捕され、未だに拘束されている現実があります。気がつくと日常的に司法や役所、学校や企業の中に非民主的なことがまかり通っています。一つずつおかしいんじゃないかと、その時その場で声をあげてこなかった結果が今日を招いたのではないかと、為政者は敗戦によって仕方なく表面的に主権者国民の憲法を受け入れたけれど、官僚システムほか現実はずっと明治憲法が温存され、意図的に民主教育を怠って来た上に、国民の側のお上に従ってしまう体質と相まって、憲法から乖離した実情を生み出して来たのだと思います。

こんな実情の中で彼等が企てる「憲法改正（?）」が私たちの暮らしに何をもたらすのか、そして近隣諸国にどんな厄災をまき散らすのか、彼等に都合が悪いから変えたいのだと言う事をしっかり自覚し、この日本の岐路に誤らない選択をしなければと、小さな国コスタリカから大きな示唆をもらった旅でした。

小さな国の大きな挑戦 ～コスタリカに学ぶ「循環する教育」～

寺田 麗子（環境ジャーナリスト）

私達は何故学び、何を知りたいのか。毎年春になるとトコロテン式に吸い上げ吐き出されていく子供達と学校を見ながら思う。年々重苦しさが漂う教育現場からは苦悩する教師の声が聞こえ、疲れた顔の生徒達がコンビニ周りに集う。物質的な豊かさと反比例するかのように精神面での荒廃が目立ち、ホテルかと思ふ立派な校舎では息苦しい管理化が進んでいると聞く。私達の社会は複雑に肥大化しすぎたが故に原点を見失いつつあるのだろうか。

学ぶことが喜びや生きる自信に繋がっていく教育現場がコスタリカにあった。学びは知恵を育み希望を生み出している。日本とは対称的なトタン屋根の簡素な校舎で、明るいい目をした子供達は自分の足元から世界を見る学びの時間を過ごしていたのだ。

平和憲法を実践しエコツーリズム発祥の地であるコスタリカに学ぼうと3月中旬、沖縄から31人が中米へ飛び立った。「軍隊のない国・コスタリカ」という響きは、きな臭いニュースばかりが続く世界情勢の中で風穴が開いたような爽やかさがある。しかも中米という紛争地域の只中にありながら積極的に対話による紛争解決を試み、半世紀を越えて平和への道を示し続けているのである。九州と四国を合わせた程の面積に4400万人が住み、その内40万人が隣国ニカラグアからの難民だという。未だ発展途上の国ではあるが、軍事費ゼロと引き換えに国家予算の25%が教育に注ぎ込まれ識字率は95%を超えている。小さな国の大きな挑戦は「知恵ある人作り」から始まっているのだ。教育省で環境教育を担当しているセシリアさんは「私達の国では、全ての教科に平和・環境・人権の視点が貫かれています。平和とは戦争がない状態だけでなく、自分自身や他人、社会との調和の中から積極的に作るものだし、自然界との調和を保つ事が環境を考えることですからね。」と話し、首都サンホセ近郊にある小学校へ案内してくれた。

ITEM（現代教育学院）小学校は3歳から12歳を対象にした私立学校で、設立して28年になるという。「環境・紛争解決・創造性」を柱に、私立ならではの先進的な取り組みが見られた。全ての学科がワークショップの手法で展開され、子供達の主体性、思考力が育まれる。学校の方針として、クラスの多様性を大事

に人種や文化の違いを前向きに捉え、お互いに尊重し協力しあう中からバランスの取り方を身につけていくという。つまり小学校の間で人生の基本的な生き方を学ぶことになる。

子供達の案内で学校の中を見て廻った私達は、昆虫の標本を見て感動した。子供達が標本用に集めていたのは昆虫の死骸だけで、生きている虫は観察した後森へ返すという。「だって命を奪うのはいけないよ。」と当然の事として説明する。参加させて貰った理科の授業でも、テーマ毎に5つのグループに分かれてワークショップ、子供達がリーダーとなって教室の外で様々な実験が行なわれた。「裸地と草地では水の浸透がどう異なるか?」「植物園と野外ではキノコの種類・数に違いはあるか?」等と言った疑問を出し、自分達で調べ、その結果から何がわかるかを話し合う。全員が協力しながら進めて行くのだ。こうした授業では、学校と契約した民間の専門化が加わって「気づき」の手伝いも行う。例えば「裸地と草地」の水浸透は草地の方が良いとの実験結果が出たら地球の砂漠化の問題に繋がるし、「植物園と野外のキノコ」から熱帯地域の生態系の豊かさに思考が及ぶ。子供達は自分の足元の出来事から地球を考える知恵を身につけていくのだ。日々の学びが世界に生きる知恵となり、お互いに協力しながら対話を重ね目標を達成する喜びを知る。

対話による紛争解決も子供達によって取り組まれる。学校の休み時間の暴力について話し合いが持たれ、いじめ・暴力があると認めた子供達は、その背景を分析した。その結果、暴力に走りやすい子供の生活状況に着目、親が共稼ぎで下校後1人でゲームやテレビを見ている事が多いなど、愛情不足が背景にあると結論を出したという。相手を責めるだけでなく、何故そうした行動を取ったのかと相手の身になって考える事から理解と調和の道が開かれるのだ。クラスメイトと調和を保ちながら五感を使って育つ子供達は、夢や希望に満ち溢れているようだった。

訳の判らない幻想に振り回されているかのような大国の迷走が、世界の調和を乱し続ける今、シンプルに地球市民としての生き方を示す小国コスタリカは21世紀の羅針盤と言えそうだ。

（「沖縄タイムス」掲載原稿に加筆）

コスタリカのファンになってしまった

内海 恵美子（雇用開発推進機構・エンパクト）

「豊か」な人々

コスタリカではデータによると、スペイン系白人 95%、アフリカ系 3%、先住民 2%からなる 359 万人とニカラグアからの密入国者を受け入れて、500 万人近い様々な顔立ちをした人々が共に暮らしている。ニカラグアからの人たちは、着の身着のまま入国しているが、彼らに仕事を与え、質素ながら家が持て、子供たちは教育を保障されている。実に懐の深さを感じさせる。

私たちをガイドしてくれた女性は父が大阪出身で母親がコスタリカ人であったが、「私の母親には 12 人の兄弟がいるが、兄弟と思えないほど顔立ちが異なる」と、歴史的に繰り返された混血で家族にも違いがあって当然と語った。

この国の大らかさや平和共存の考え方も、身近な「異人種」との共存から生まれたものなのかと思うほど、様々な顔をした人々が明るく、さわやかに生きているそんな感じがした。また「ストレスは感じないよ。」と、そのガイドさんは屈託なく笑った。人への細かい配慮や気遣いを伴う仕事、かつ、ガイドの勉強には終わりはないと、学びつづける知的で「緊張」を伴う仕事であろうにも関わらず、ストレスが無いというのは、決して「ノー天気」なせいではなく、人と社会システムとの調和がとれているからではないだろうか。

日本では、経済的に恵まれているにも関わらず、ストレス、自殺者の増加といった、生きづらい社会環境が広がっている。改めて豊かさについて考えさせられた。

エコツーリズム先進地域

敢えて道路を舗装せず、過剰な人の出入りを禁じている。自然保護区、その一角のモンテベルデの森林を歩いた。

モンテベルデはアメリカのクエーカー教徒が徴兵を拒否し、軍隊を廃止したコスタリカに安住の地を見出そうと住み着いたことが自然保護へのスタートとなったという。彼らは開墾を始めたが、雲霧林の自然の特異性に気付いてその保護を始めたのだという。以後、世界中のエコツーリズムのあこがれの地となっている。われわれがトラッキングしている道すがら、ヨーロッパや北米からのグループとすれ違った。またコーヒー園のエンタテイメント会場では、飛び入り客を交えた様々なパフォーマンスが行なわれたが、お客様方は実に多方面からの訪問者であったことから多くの人々を魅了している地域であることを伺わせた。自然保護、平和、安心、安全、豊かな感性を持つ人々、マイルドな気候等々、引きつける要素は多く、それぞれを活かし相乗効果をもたらしている。

長さ数十メートルのつり橋をいくつも渡っては足を止め、無数のコケ、着生植物や鳥の観察、地域のエコシステムを知るという「至福の時」を満喫した。ガイドさんたちは、生物学者ばりに造詣が深い。瞬時に野鳥を発見しては双眼鏡を覗かせ、説明を行なう。着生植物で重くなった木は倒れ、そこに光がさして「森の窓」、空間が生まれ、そこから新しい生命が誕生する。動植物が織りなすダイナミックな生態系を、じわりと教えてくれる。

ガイドは、INBio（注）のガイドコースで学んだり、観光学科等を卒業後、自らも研鑽を積んでから資格をとららしい。資格者は、自然保護区等が認定し、各保護区で認定されたガイドが組合に入ってその地域で活動をするという。ツアーの入場料は地域の保全とガイドの生活をも支えている。地域の人が自分たちの地域を伝える。地域の豊かさを、外国人に紹介し、地球上の価値を伝える、尊い仕事に従事している誇りが、彼らの表情からは十分感じ取れる。エコツーリズムの真髄は、生きる喜びがそこにあり、その価値を他者と共鳴しあう関係作りにあるというメッセージを受けた気がした。

ところでこの人たちはどのようにして育ってきたのであろうか。この回答の一つは、後に理解が進んだ。教育省高官のセシリアさんの案内で私立の小学校を訪問した。校長のデダ・ベイルート先生によると「一つの教室には色んな子がいる。発達した子、障害のある子、でも一緒に学ぶ。学校の方針は実践重視で、いろいろな教材を使う。個人の机は無く、グループ別にテーブルの周りに座る。先生方もグループになって働く」。そこで、子供たちの思考力、判断力がはぐくまれ、生きる基礎が養われていく。

対話、平和、民主主義を学ぶ教育

もっとも、感動させられるのは、教育への意気込みである。民主主義を支える基盤として子供のうちから教育を実践的な行動を通して、考える主体を形成している。そのような機能の一旦が数日間の訪問からも感じられた。

教材は身近な物を題材に使って世界規模の問題にまで考える過程が見られた。「紛争に関しては、人間ももう一つの環境であると捉えている」。「誰もが戦争のない社会、平和を築く義務がある。イラク戦争に参加している国の文化、戦争の原因について考えた。個々人の生徒がある国を選び、その国に住んでいる人の身になって考え意見を述べる。そして、何を国連に頼むべきか（要請すべきか）を考える。神にも祈る。家族にも参加してもらって一緒に討論し、各メディアの撮影したビデオを見て、いろんな説、主張の異

なるのを見て、コスタリカが果たすべき役割はなにか考える」。「残念だが、コスタリカでも麻薬や武器の問題がある。暴力の問題では、生徒たちが自分たちでデータを集めて、一つの結論を見出した。それは、暴力的な子供の場合は、一人でテレビを見たり、ゲームをしたりする時間が長い子供ほど暴力を起こすということ。一人でいる時間を短くし、親子の対話の時間を長くするといった家庭の中でも努力することによって、暴力（紛争）を減らせるという提言を生徒が行なった」、という。

「この小学校の6年間に培った基礎はその後、中学校に行ってもリーダーシップを発揮しており、将来の人間的な基礎になっている」、と校長先生は結んだ。

軍隊廃止後もその方針を維持する仕組み

「コスタリカは1949年に軍隊を廃止し、軍事予算を教育、福祉、医療に回した。民主主義を維持するのはたいへんだが、様々な危機を乗り越えてきた。それを可能にしたのは、常に対話の道を通じたからだ。国民はそのように教育されてきたし、今も子供たちにそうしている。紛争を解決し、人権を重視する。差異を認めながら対話を続ける。対話こそキーポイントである」（「週間金曜日」カルロ・バルガス国際法律大学教授）。

軍隊廃止時のフィゲレス大統領の夫人で、沖縄でも講演されたカレン・オルセンさんがホテルを訪ね、「私が日本に望むことは平和憲法を守り、行動することです。平和は守るものではなく、作るものです」と語っておられた。

コスタリカにおいて民主主義はどうやって維持されているのか。まず私の注目するのは、司法・立法・行政以外に第4番目の権力として、最高選挙裁判所（TSE）という独特の裁判所の設置である。行政、立法は常に公正な政治をするとは限らない。司法は法に反する者を罰するという限界がある。そして権力者はそれを手にすると独裁者になろうとする者が出てくる。そのような面について中立的な立場の機関が必要と考え設置された機関である。

TSEが投票日の4ヶ月前から、交通をはじめ全ての警察権限を掌握し、全国民が自由に道路・公園を使って選挙活動ができるよう、調整する。開票もTSEが行なう。それに付随して、子供たちも登録している子供は選挙ができる。選挙運動も行なう。大人と全く同じシステムで投票用紙をTSE管理下の選挙委員会の監視の下に行なう。子供の投票結果も、大人同様に集計結果がマスコミにより発表される。子供の投票結果は、選挙結果には影響されないが、子供たちは、選挙を体験することによって、民主主義を守るためには選挙が如何に大切かを学ぶという。権力は常に肥大化するものである。だからこそ、民度を高めて、国民が国家権力を抑制するものとして機能しない限り憲法は生きないものである。抑制するシステムとしてTSEが機能していると考え。そしてその基礎が国民教育である。

日本では憲法が、統治権力（国家）への国民側からの命令、義務規定であることが理解されていない。国民の側の主体的意思が統治権力を制約する。だが、国民主体性の形成が未熟で、平和憲法を活かせないでいる。憲法9条を率直に読めば、自衛隊の海外派遣はできない話である。また多くの国民はそれを望んでいない。対話による民主主義、民意に基づく政治システムが機能できていない。国民の政治への関心のなさが、それを許している。

「沖縄戦を語るといった平和教育がスケジュール的になり、生徒の平和意識を高めるまでには至らない。解決のためのアドバイスを頂きたい」との質問が団員からなされた。

個々の質問に対応できる時間的余裕はなかったが、コスタリカの教育関係者のお話の一つの回答ではなかろうか。つまり、戦争体験を聞くという「受身」ではなく、実践と対話重視のプログラムを展開していること。子供も選挙運動を行い、主体的に社会に参画することの意義を考えさせていること。身近な題材から自分の頭で考える子供を育てていること。子供は家に持ち帰って、親との対話で再度自己構築をする機会を持つ。もし説明不足ならばもっと学ぶ必要性を感じる。なによりも、親の意識を変えることは、社会の中堅層の意識をも変えることを意味する。社会人教育の不足を子供の教育システムが補完する機能にもなっている。

実は環境教育については、80年代頃から意識され始め、リサイクル活用法も子供が学校で学んだことを家庭に伝えているという。新しい世代が学ぶ環境作りによって、古い世代にも働きかけている。

コスタリカは、軍隊廃止後も何度か危機的状況を体験しているが、今も平和憲法を維持している。冷戦構造下、中米各国を巻き込んだ国際紛争の中で、改めて1983年、「永世非武装中立宣言」を行ない、アメリカの圧力を跳ね返し、積極的に近隣諸国の紛争に関わり調停と仲介を通じて平和を作り上げている。

コスタリカの憲法で特徴的なもう一つの面は、国会議員や大統領の連続再選禁止条項で、大統領は二期8年に限る（2003年4月修正以前は一期のみ）。多選の弊害や政治的利権化を予防している。憲法理念を具体化するシステム構築と民度を醸成する教育により、平和憲法が日常的に息づいているのである。

今回のすばらしい体験を設けてくださった桜井先生には心から感謝申し上げます。沖大の学長としての激務が始まっているかと思います。大学教育の中で、私の職場の「学生インターンシップ事業」や「学生起業家育成事業」等、すこしでも学生の自立支援に関わらせていただければ幸いです。

（注）…国立生物多様性研究所

ポロの木と少女

照屋久子（沖縄環境ネットワーク世話人）

先日、近くの保育所を訪ねた。新入園児を迎えるこの時期、空には手造りの赤いこいのぼりが張りめぐらされ、門から園舎まで色とりどりの草花が通路を埋めつくすほどに咲いていた。私はコスタリカで訪問した学校（3歳から通学可能）の校庭を思い出した。

* * *

校門から入ると高いポロの木が一本。すぐにこの木の異変さに気がついた。高い幹の上には校舎側に伸びた二本の枝だけが残されていてオレンジ色の花が咲いている。葉のない枝には麻袋のようなものが幾つもぶら下がっていて、カラス大の黒い鳥がとまっていた。

やがてこの木の下で、10歳ぐらいの女生徒が、訪問者である30人の大人に校庭のエコシステムの説明を始めた。ポロの木はコーヒ園に植えられるためにペルーから移入されたこと、この場所が学校ができる以前はコーヒ園であったこと（ポロの木は日陰を作り、豆科で土を肥やす効果があるのでコーヒ園に植えられる）、50歳になる木が学校を守ってくれたこと、しかし死にかけて幹や枝がくさり大部分切り落とされてしまったこと。オナガムクドリの巣がある枝は残されているが、巣立ち後に木は倒すことになっている。雛が巣から落ちた時は動物園に届けたこと。

数羽の雌鳥と共同生活をしている雄鳥は木の下に集まった人に警戒して高い声で泣き続けている。雌鳥はおのおの巣袋に餌を運び続けていた。ぶら下がった巣に雌鳥が入ると雛の餌をねだる声が聞こえてくる。雄鳥と雛たちの鳴き声で少女の声は掻き消されそうになりながら、興味深い話を続けていた。

「どうして木が死にかけているのかわかるの」

「皮がむけて、木が臭くなっているから。」

小さいがしっかりした声で答えた。皮が剥げ落ちた木に鼻を近づけると臭かった。

少女は次の説明に移るため校庭を移動して若い広葉樹の前で留まって説明を始めた。校庭の木々は渡り鳥や他の生物の回廊として父兄といっしょに植えたこと。三百種の植物を植えていること。校庭には鳥以外にリスが住んでいることも話した。また移動を始めた少女に「どのような木を植えているの。」と聞いてみた。「鳥の餌になる実がつく木」と小さい声で私の眼を見つめて答えた。

見わたせば校庭には多くの木、果樹が植えられており、セメントが貼られているのは校舎を結ぶ通路だけで駐車場も砂利が敷かれていた。学校すべてがエコシステムとして機能している。中庭には実をつけたオレンジの木、常食となるタロ芋やバナナ、輸出品一番のコーヒの木も植えられていた。

生徒だけではなくガードマンまで、全員が学ぶという環



境プロジェクトの為に種苗園、植物園（家庭から持ち寄って校庭に植える植物を育てている。）、堆肥園（弁当の残り、鉛筆まで堆肥にするという。大きな箱の中には黒いみごとな堆肥ができていた。）、農園まである。低い柵で囲まれた小さい農場では子供達がスコップを手に土を耕していた。人参やカボチャ、ハーブのコリヤンダーを植えていた。ふざけたり、無関心そうな子はいなく、生き生きとした目が印象的だった。幼い頃からすべての学科を通して自然を理解し、接しかたを学ぶという。「人が自然を勝手に使ったため、困った状況になっているので自然との接し方を変えることを希望している。人も自然の一部だから。」とポロの木の下で訴えた少女の顔を思い出した。

沖縄よりはるかに所得が少ないこの国の学校の建物はすべてトタン葺き、小さい講堂の壁の隙間から空が見えていた。体育館も屋根だけで壁がない。しかし清掃が行き届き、明るい笑顔の人々に貧しさを感じない。まだ暗い早朝、リックを背に早足で通勤する多くの若者の足音とざわめきをホテルの窓から聞きながらエネルギーを感じてきた。

貧しくともしっかり教育されて、自然と共存する力を身に付けた子供たち。国土の大部分の森林を破壊したあと、世界のエコツーリズムの発祥地として多くのツアー客を誘致しているのは過去から学び、自然の重要さを国民が認識しているからに違いない。

旅で一緒だった若者達は、食事の付かない安いホテルに宿泊していた。「鍵が開かない、シャワーの水が冷たい、ゴキブリがいる。」などと不安そうにしていたが、帰る頃には「慣れましたよ。外食も楽しみの一つ、又来たい国」と余裕さえ見えて若さに感服した。彼らもまたこの国がしっかりと未来を築いていることを感じたにちがいない。

* * *

コスタリカと同様、美しさと生物多様性に満ちた沖縄の自然をエコツーリズムの島として継続していけるのか、越えなければならない山が幾つもある。

コスタリカ そしてオキナワ

長谷川 生里（沖縄大学生）



世界は美しさで溢れている。私は今までそのことに気が付いていなかっただけなのだろう。

コスタリカは美しい国であった。自然や町並み、そして笑顔が。コスタリカとは摩訶不思議な国である。それが率直な私の感想である。奇妙なバランスの中でコスタリカという国はとても美しく見え、そして本来世界は美しいのだと思ったのだ。

私がコスタリカに行こうと考えた理由は写真を撮ることであった。何かを学ぼうといったような目的は特になかった。「若いときにやれることはやったほうがいい。行ける所には行ってみたいほうがいい。」そんな安直な考えが今回の参加を決意させたのであった。

「コスタリカ」とはスペイン語で「豊かな海岸」という意味である。その言葉通りコスタリカには多くの自然が残され、エコツーリズムのメッカである。自然を守ることとは単独の考え方ではなく平和であることという考え方まで広がっている。今まで私たちが持っていた視野を大きく越えた考え方をコスタリカは世界に提案し、実践しているのだ。この旅の目的の概要はそのような感じで理解していたつもりであった。私はとにかくこの目で見たかったのだ。コスタリカの景色を、町を、人を。私は難しいことなど考えずにカメラを提げて過ごし、心の行くままシャッターを切っていたように思う。

首都であるサンホセの町の中を歩いていて、私はこの町の不自然さを感じた。町並みはニュースで目にしたことのあるスペインのマドリードに似ているようにも思え

た。現在コスタリカに多く居住する多くの国民はスペイン系であり、コロンブスの新大陸発見を機に移住してきたスペイン人の子孫である。通貨はコロンだが、ほとんどの店でドルが使える。西洋の文化がこの中米の暑い国にやってきて先住民族を支配し、町を作り、人が増え、様々な問題を作り、解決しながらこの国を作ってきたのだろう。

コスタリカにはスペイン系を主とする白人との混血、アフリカ系黒人、パナマ運河の構築の際の労働の為に中米にきた中国人、また隣国からの労働者そして先住民がコスタリカには住んでいるがそのすべてが「コスタリカ人」とであるという。私の感じた不自然さはおそらくこの国は歴史の中で不自然に人が集まり作られた国であると感じたからであろう。

私たちが訪れた自然保護公園には原生林が広がっている。雨のなかで木は輝き、本来の自然の美しさで溢れていた。太古では当たり前のように広がっていたのであろう原生林をこうして私たちは入場料を払って舗装された道を列を成して歩いていることも不思議である。この現状を作ったのは人間のエゴであることも忘れてはならないと感じた。

コスタリカの自然について実際研究している人たちはもちろんコスタリカでのエリートである。私たちのコスタリカの訪問はそのような海外からの観光客に向けられたメニューであったと感じたのであった。

私にはコスタリカの作る様々な矛盾さえも美しく感じた。それは私がこの国を好きになったからであろう。そしてコスタリカの人たちももちろん同じであると思う。そして私の今住む沖縄も本来美しいはずののだと、コスタリカに行って気付かされたのだ。

もしかしたら自分の国、そしてこの世界を好きになることが私たちの暮らしの中で足りなかったことなのかもしれないと思ったのである。すべての問題解決はそこから始まるのかもしれない。



世界市民が世界を変えるとき ～世界社会フォーラムに参加して～

砂川かおり（沖縄環境ネットワーク世話人）

1. 世界社会フォーラムとは

世界社会フォーラム (World Social Forum, WSF) は、毎年一月末にスイスのダボスで開催される世界経済フォーラムの年次総会、通称ダボス会議に対抗して開催される国際会議である。ダボス会議が世界の政治家と経済関係者のみの会議であるのに対抗して、WSF は民衆の立場から、グローバリゼーションのもたらす様々な問題を考える社会運動となっている。地球的連帯と民主的で現実的な代替案を求める多数の NGO・NPO・社会団体によるこのグローバルなネットワークは、米英軍によるイラク攻撃及び、その後の占領統治と戦争に反対する平和運動の世界的高揚でも、継続的に中心的な役割を果たしている¹。

2001 年から毎年 1 回ブラジルのポルト・アルグレ市で開催されてきた WSF は、ブラジルとラテンアメリカを越えて、より顕著にアジアとアフリカの懸念を取り入れるために、2004 年の WSF の主催国としてインドが選ばれた。この会議には、約 10 万人が参加し、経済の自由化、環境と開発、戦争と平和、労働、貧困、食料、差別、民族問題などの様々なテーマで約 1200 のワークショップが開催された。その中で WSF の主要なイベントとして、反戦総会が多くの団体の呼びかけで企画された。反戦総会では、米英軍のイラク攻撃や占領統治、パレスチナ・イスラエル問題に代表されるような戦争や軍事主義拡大の動きに対して、今後の世界的な反戦運動の戦略などを話し合う場として、数千人規模の大集会、数百、数十人規模のワークショップ、連帯デモが行われた。

2. 国際反米軍基地会議に参加して

国際的な軍事活動を構成する重要な問題として、世界における米軍基地問題が認識され、国際的な反戦運動の中で、国際反米軍基地会議が米軍基地駐留国の NGO を中心に呼びかけられ、1 月 17 日と 20 日に開催された。この会議には 34 カ国から 125 人が参加し、参加者は、駐留米軍地域の基地反対運動家、環境団体、人権運動団体、女性運動団体、反 IMF (国際通貨基金)・WB (世界銀行) 運動家、反債務運動家などの多様な運動団体の代表などであった²。

17 日の第 1 セッションでは、米軍の駐留とそれに対する抵抗運動について、米国、アルゼンチン、プエルトリコ(米国の準州)、ブラジル、エクアドル、ドイツ、ベル

ギー、イタリア、英国、ギリシャ、ディエゴ・ガルシア (英国の海外領。かつてはモーリシャスの領土だったが分割された。)、ニュージーランド、オーストラリア、キルギス共和国、沖縄、日本、フィリピン、韓国などの米軍駐留国、地域から報告が行われた。ラテンアメリカからは、「この地域のエネルギー、水、生物多様性などの天然資源を管理しようと、そのような地域に米軍が配置されている。また、債務緩和や貿易交渉が米軍の駐留を受け入れさせる脅しとして使われている。警察の訓練では、軍事的訓練にアメリカの援助がシフトしている」などの報告があった。ヨーロッパからは、「この地域の米軍基地がイラク戦争において使われた。米国の大量破壊兵器が密かに貯蔵されている。」などが報告された。ディエゴ・ガルシアからは、1970 年から始まった米軍基地建設と訓練によって、島から強制立ち退きされた島民が、社会的経済的問題を抱え、現在も島へ戻るための運動を展開しており、運動への連帯を呼びかけた。キルギス共和国からは、「公共の議論がほとんど行われないままに米軍の駐留が始まり、米軍は抑圧的な政権を支え、人権が侵害されている」という報告があり、フィリピンからは「1991 年に米軍が撤退したが、米軍との新たな協定によって米軍施設が再建設される圧力がある。」とフィリピンで行われている米軍訓練の長期化に懸念が示された。韓国と日本からは、米軍駐留による被害の歴史があり、市民に対する米軍人の犯罪は裁かれなかったり、土地が囲い込まれ、汚染されている状態があること。そして互いの住民の抵抗運動の交流などが紹介された。

20 日には、戦略会議が開かれ、国際的なネットワークの目的、活動や運動について活発で建設的な議論が行われた。そして、今後は活動の柱として、(1) 調査・教育、(2) 情報伝達・発信、(3) 行動、運動、連帯の構築 が提案された。(1) 調査・教育では、「米軍基地とは何か」について住民の視点から定義する。性的虐待、環境への影響、主権の侵害などを監視する。(2) 情報伝達・発信では、ウェブサイトとメーリングリストによる情報の共有と、協働行動について戦略の話し合い。(3) 行動、運動、連帯の構築では、国際共同行動に関する提案や運営が既に行われている。具体的には、去る 3 月 20 日に国際反戦行動が企画され、実現した。

3. WSFによる、米軍基地の環境問題解決のためのネットワークの可能性と課題

分断された個別のグループが抱える問題を一つの会場に集めることによって、全体の構造を見渡せるようになり、その問題に共通の背景を見つけ、問題の解決のために協力していく方法を見つけ始めていることがWSFの最大の成果という評価³は、国際反米軍基地運動にもあてまはる。これまで米軍基地問題に対して、平和団体、女性団体、環境団体などが国際的な協働の場を継続して確保することは難しかった。今回の国際反米軍基地会議は、参加者の地域の多様性、専門分野の多様性、そしてインターネットという情報手段によって、問題解決に向けて様々なポジティブな展開の可能性を反米軍基地運動にもたらしめている。しかしながら、直接的な抗議行動だけでなく、米軍基地からもたらされる様々な問題を国際社会の中でより顕在化させ、政策決定者に対して問題解決への具体的な提案を行い、最終的には、米軍に依存しない安全保障のあり方までもを提案できるだけの力量を民衆側がつけられるかどうか、今後のこの運動の成否を決めることになるだろう。

米軍基地をめぐる状況は、停戦状態下の韓国、米軍占領下のイラク、土地を強制収容されているディエゴ・ガルシア、「同盟国」の地域でありながら米軍基地が集中している沖縄、基地が閉鎖されたプエルトリコのピアケス、常駐ではないとしながらも軍事演習が増加しているフィリピンなど、米軍基地をとりまく社会的、政治的、経済的状況は多様である。そして、住民の関心も当然のことながら、米軍を取り巻く住民たちの暮らしや社会の状況によって異なってくる。軍事優先のイラクにおいては戦闘状態から人命や財産を守ることが優先課題であり、ディエゴ・ガルシアの場合は、まさに沖縄の土地闘争のように、生活、生産基盤である土地や沿岸域を取り戻すことが課題となっている。日本や韓国の場合は、地位協定によって、米軍が環境保全義務を免責されていることによってもたらされている環境汚染や環境破壊が問題となっている。

今回の会議で、米軍基地の環境汚染については、プエルトリコ、フィリピン、韓国、日本からの問題提起が活発であった。これらの国及び地域は、米軍基地反対運動において、相互の交流があり、米軍基地に関する環境調査を実際になんらかの形で実施してきているという共通点がある。環境汚染を顕在化させるためには、水質、土壌、生物、人間の人体に含まれる汚染を測定するなど、具体的な環境調査の実施が不可欠である。環境調査の実施によって、客観的に環境問題と被害を認識できるので

ある。そのためには、専門家、関連した調査研究の情報の入手と蓄積、調査費、そして調査を実施する継続的な時間と取り組みが必要となってくる。この点において、前述の地域では、米軍基地に関する環境運動は、地域住民、環境問題の専門家、医師、法律家、NGOが協働し、継続的に問題の解明と解決に取り組んでいる。そして、世界的にも、これらの取り組みは先進的であると評価できると同時に、この問題における、沖縄をはじめとする、これらの地域のリーダーシップが強く求められている。

報告の詳細（英文）は、

<http://www.focusweb.org/index.php?option=news&task=viewarticle&sid=157>

国別報告（英文）は、

<http://india.indymedia.org/en/2004/01/208751.shtml>

NO US BASEのメーリングリストについては、管理者 Mr. Herbert Docena, Focus on the Global South, herbert@focusweb.org にご連絡ください。

4. 世界市民の連帯が日米同盟を超えるとき

～イラクでの日本人人質事件に思う～

今、世界社会フォーラムの日本人参加者が中心となって、メーリングリストが作られ、いろいろな情報が交換され、協働のための戦略が練られている。このメーリングリストは、3月20日の国際反戦デーの統一行動を組織化する時にも有効に利用された。そして、今月8日に「イラクでの日本人人質事件」が起った時から、このメーリングリストでは、主要なメディアが取り扱わない様々な情報が交換され、「代替メディア（オルタナティブ・メディア）」の役割を果たしている。その中で交換される情報や意見は、平和的で現実的な提案である場合が多い。イラクの現状報告、平和的な集会の組織化と参加の呼びかけ、効率的なメディアの活用方法、政治的な提案、政策的な理論の提言、国際NGOからの連帯表明と戦略提言、国際的な統一行動への参加などとても実践的である。

人質となっている3人の仲間を思い、その家族を支援し、自分自身に何が出来るかを模索し、行動する、そのボランティア精神に溢れる市民の姿を見ると、日本そして、国際社会が世界市民の活動によってゆっくりと良い方向に変化していくことへの期待が湧いてくる。

「米国での『9・11事件』以降、政府と市民社会の関係は、全く変わってしまった。1999年のシアトルでのWTO反対運動の頃には、市民社会が政府よりも優位な立場に立つことが可能となりつつあった。しかし、9・11事件以降、抗議行動を行うNGOや市民に、政府はテロリストと名付けることで、拘束したり、運動に圧力がかけら

れるようになっている。厳しい時代だ」と、ムンバイでの反戦集会に参加していた際、日本の国際協力 NGO 代表の H さんが話していた。だからなおさら NGO や市民による政府などへの抗議の方法・表現手段は慎重に選択して行う必要があると、私はその時痛感した。

4月13日の日本のマスコミからのインタビューに対して、イラク・イスラム聖職者協会 アブドル・サラーム・アル・クバイシ氏は、小泉首相が（人質を拘束している）武装グループを「テロリスト」と呼んだことを非難した。そして、彼は「ファルージャの人たちはテロリストではなく、国を守るために戦っている」⁴と説明した。

ここで、私たちは、「テロリスト」と、メディアや政府が呼んでいる人々の実情を、メディアや政府の視点からではなく、市民の視点から注意深く見ていく必要がある。イラク、とりわけファルージャにおける紛争が、暴力や混乱をもたらすための武装闘争か、あるいはアメリカの占領政策に絶望し、米軍に抑圧されている人々による、自らの命や民族の誇りを懸けた抵抗運動なのか。世界で起っていることについて主体的に情報を求め、選択する中で、真実が見えてくるはずである。

その意味でも、インターネット社会にあつて情報を主体的に入手、選択し、そして、世界市民として行動すること。それによって世界市民の連帯が現在の日米同盟の限界を超える時が遠からず訪れることを、人質開放、イラク、そして中東における平和の実現と共に祈っている。

WSFのメーリングリストへの参加を希望される方は、題名を「ML 参加希望」とし、

- ・氏名（ハンドルネーム不可）
- ・所属団体（学生は学校名でも可 個人参加の場合は無記入でも可）

・メールアドレス ・この活動をどこで知ったか

を記入の上 wsfj@talktank.net まで送付して下さい。平和・環境・貧困問題・マスコミ問題など、何かしらの社会問題について関心がある方の参加を歓迎しています。興味のある方は、登録してみてください。

※写真は日本・韓国の NGO や労働組合によるイラクへの軍隊派兵、日韓自由貿易協定協商に反対する集会の様子

1 加藤哲郎（一橋大学大学院社会学研究科教授）、「グローバリゼーションと『もう一つの世界』」——『世界経済フォーラム対世界社会フォーラム』による定点観測——

<http://member.nifty.ne.jp/katote/ecoforum.html>

2 Report of The International Anti-US Bases Conference by Focus on the Global South, www.focusweb.org

3 世界社会フォーラム日本連絡会 「世界社会フォーラムとは」

http://www.jca.apc.org/wsf_support/wsf_intro.html

4

<http://news.fs.biglobe.ne.jp/international/tm040413-942262.html>



アメリカで「ジュゴン訴訟」が始まった

沖縄環境ネットワーク世話人・ジュゴン訴訟原告・真喜志好一

★原告ジュゴンほか、被告ラムズフェルド国防長官ほか

ジュゴン訴訟が2003年9月26日に米国、カリフォルニア州オークランドで始まった。

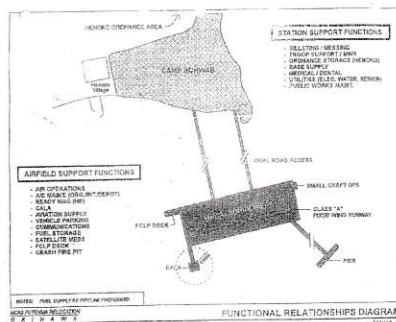
ジュゴンを原告の先頭にして、「ヘリポート建設阻止協議会（命を守る会）」、「日本環境法律家連盟」、「ジュゴンネットワーク沖縄」、「ジュゴン保護基金委員会」、の4団体と3個人、アメリカ側からは「生物多様性センター」「タートルアイランド回復ネットワーク」が参加している。

この訴訟は、辺野古の海上基地計画が、米国の「国家歴史遺産保存法（NHPA）」に違反しているという訴訟である。この法律は、アメリカが国外で行う活動で、

「いかなる文化財も米国は侵してはならない」と定められているという。ジュゴンは、日本の文化財保護法で天然記念物に指定されており、捕獲や生息環境を乱すことなどが禁じられている。

辺野古海上基地計画について、米国防総省がまとめた97年9月29日付の「運用構想」（以後97年OR）を証拠として提出している。引用した右の図には、海上基地は陸地とつながる二つのアクセス道路、栈橋、弾薬装着ヘリパッドの要求が描かれている。

さて、97年ORには、ジュゴンの保護政策について何の記載もない。それで、「国家歴史遺産保存法」にしたがって、ジュゴンへの悪影響を回避するための方策を示すように求める裁判である。つまりは米国に海上基地建設の断念を迫る裁判なのだ。



★被告ラムズフェルドの答弁書とピーターさんらの来沖

2003年12月9日付で、ラムズフェルド国防長官側からの答弁書が出され、「海上基地建設にアメリカ政府は関与していない」と不思議な主張をしている。

アメリカ政府の関与を立証する資料収集・県知事訪問などを目的に、「生物多様性センター」のピーター・ガルビン氏、米国最大の環境派弁護士事務所「アースジャスティス」のマルチェロ・モロ弁護士、それに東京・大阪の弁護士が先日2月24日から27日まで来沖した。辺野古の人々の海との関わりを聞きとり、船で現場も見た。（写真の4人は、右から命を守る会・金城裕治代表、ガルビン氏、モロ弁護士、通訳する関根弁護士）



★ジュゴン訴訟のきっかけとこれから

アメリカでジュゴンを原告として訴訟を起こすことは、環境法律家連盟事務局長籠橋弁護士によって2000年頃から提起されていた。マリアナ諸島での米軍爆撃演習を渡り鳥の飛来地であることから中止させた実績をもつピーター氏を、2003年3月に沖縄で開催した「軍事活動と環境・国際ワークショップ」に招いた。そのときのピーター氏、籠橋弁護士、目崎茂和教授と、三者のセッションからジュゴン訴訟は具体化した。

2003年8月、サンフランシスコに渡った日本の弁護士たちとモロ弁護士らの打ち合わせがピーターさんの世話で実現し、9月の提訴に至った。今年3月15日、オークランド地方裁判所で進行協議あり、辺野古海上基地への米国の関与の有無を明らかにすることから始まることになった。

5月に米国側から、関与がないことの主張、立証。6月、ジュゴン側から米国が関与していること的主張、立証。7月、米国側から再主張、立証。8月には裁判所の判断が下される。米国の関与を裁判所が認定することが第一歩になるらしい。

米国の関与を立証する証拠として数点の文書を渡したが、それらが役立つことを願っている。米国の関与を裁判所が認定すると、「基地建設にNO!」との名護市民投票の民意に立ち戻る契機が作られよう。6月の国際サンゴ礁シンポジウムに参加するため、「生物多様性センター」のメンバーと、「アースジャスティス」の弁護士が来沖する予定である。来沖が実現したら、米国の皆さんの献身に感謝しつつ那覇、名護などで「ジュゴン訴訟」報告の集まりを持ちたいと考えている。

エコネット

～琉球新報・沖縄タイムスから拾った各地のニュース（2004年1月～3月）～

2004年

- 1/1 日米地位協定の機密文書入手、条文超える米軍優先
- 1/6 普天間代替基地問題 地質調査で県の作業に遅れ
- 1/7 映画「ニモ」の影響か クマノミ減少 乱獲に危機感
- 1/8 「海の森構想」NPO、沖縄でコンブ育成提唱
- 1/8 泡瀬埋め立て問題 年度内に仮設道工事再開
- 1/10 普天間代替基地問題 大浦湾でサンゴ群生確認
- 1/13 新石垣空港環境検討委員会 サンゴへの影響なしと予測
- 1/14 普天間飛行場の跡地利用検討委が発足
- 1/15 キャンプ・ハンセンの都市型訓練施設、米軍が今月中に着工
- 1/15 沖縄環境ネットワーク 畜舎排水処理の新技术で冊子作成
- 1/17 普天間移設問題で市民団体、国際保護連合に提案へ
- 1/19 <基地被害>米軍車両が道間違え畑で転換
- 1/20 都市型訓練施設建設問題で金武町伊芸区、県と施設局に抗議
- 1/22 嘉手納基地で拡声器演習を29・30日に集中実施
- 1/22 環境省、希少種の鳥を衛星調査
- 1/25 辺野古海上基地予定地でジュゴンのほみ跡発見
- 1/27 <米軍拡声器演習>嘉手納町議全員で基地監視
- 1/27 石垣島の石西礁湖 20年余でサンゴ群の75%消失
- 1/28 日米地位協定 東門美津子衆院議員ら今月末に訪米で改定訴え
- 1/29 在沖アメリカ4軍調整官会見 在沖3000人をイラク派遣
- 1/29 嘉手納町議会 全議員がリレー監視 拡声演習に対抗
- 1/29 宜野座漁協 ジュゴンの保護まかせて 模型で研修
- 1/30 <都市型訓練施設>金武町伊芸地区が建設阻止で看板設置
- 1/30 日米地位協定で政府、機密文書の増補版保有
- 1/31 在沖米軍の犯罪 5年連続増加で歯止めかからず

- 2/1 <都市型訓練施設>金武町が反対の看板製作
- 2/3 泡瀬埋め立て予定地 仮設道工事あす再開
- 2/4 米軍事故 伊江島の民間畑地にパラシュート降下
- 2/7 金武町の実弾射撃訓練で原野火災
- 2/8 <地位協定>環境審、県に初提言へ
- 2/9 米海軍 沖縄近海でミサイル発射実験実施
- 2/10 日米地位協定問題 緊急フォーラムで政府対応を批判
- 2/10 普天間代替基地問題で大浦湾中央海域が海上ヤード候補に
- 2/10 沖縄県環境審議会「非公開理由説明を」 基地調査で県に提言
- 2/11 普天間代替施設 海底部分の面積拡大へ
- 2/11 産業廃棄物処理について県産廃処理研、報告書で自治体負担も提言
- 2/12 <都市型訓練施設>伊芸区が反対総決起大会
- 2/13 那覇市の牧志公設市場跡地でフリーマーケット
- 2/13 普天間飛行場について米側が代替施設なし返還検討を要請
- 2/14 普天間返還報道について県関係国会議員「事実無根と確認」
- 2/15 <キャンプ桑江返還跡地>汚染土壌、県外搬出も
- 2/17 <普天間代替>県文化環境部が辺野古沖調査で意見書
- 2/18 宮古の下地島空港 米軍がヘリ着陸届け出
- 2/19 <嘉手納基地>超大型輸送機がイラクへ出発
- 2/20 <キャンプ桑江>施設庁長官「汚染土壌の県外での処理検討」
- 2/20 在沖海兵隊イラクへ出発 派遣期間延長も

2/20 下地島空港 県の自衛要請無視 米軍ヘリ強行着陸
 2/21 <平和運動センター> 5月に普天間包囲を計画
 2/22 米軍再編「移駐の計画ない」 太平洋軍司令部がコメント
 2/23 <日米地位協定>「考え方」弁護士が公開求め提訴
 2/24 下水道再生利用 大型施設は順調 進め民間地
 2/25 普天間飛行場返還問題で宜野湾市基地対策協議会 5年内返還へ最終答申
 2/27 <普天間代替>陸上ヤード設置に中城湾港も検討
 2/28 名護市、ヘリ基地反対協要請で作業ヤード説明会検討

3/3 <建設廃棄物>2002年度の再利用率 88%
 3/3 <キャンプ・ハンセン>都市型戦闘訓練施設 月末にも着工
 3/5 <石垣市>最終処分場で感染性廃棄物投棄か
 3/5 <都市型訓練施設>県外業者が多数 異例の入札<都市型訓練施設>
 3/8 <沖縄平和連絡会>「普天間」無条件返還を求め抗議集会
 3/9 低周波騒音公害深刻 普天間周辺で 90 デシベル超 170 回
 3/10 県自動車リサイクル協同組合 全国で初めて車冷却液の再生利用開始
 3/10 <都市型訓練施設>逢沢副大臣、米軍の建設に理解示す
 3/12 <地位協定>政府、米兵未収容でも「拘束」
 3/13 <北谷町汚水問題>米軍敷設管が漏出源可能性
 3/14 オサガニヤドリガイ>泡瀬干潟で本島初確認
 3/18 参院予算委>米軍ソナーで海洋生物に悪影響も
 3/19 恩納分屯地 P C B 汚染>基準超える重金属検出
 3/20 地位協定>凶悪事件に限り米の立ち会い容認
 3/23 イラク開戦 1 年>沖縄から続々派遣 特殊作戦にも従事
 3/25 <普天間代替>陸上ヤード設置に辺野古地崎も検討
 3/27 <普天間代替>作業ヤード関連 防衛施設局が情報隠し
 3/29 <恩納村 P C B 汚泥>処理水は大港川へ
 3/30 <新石垣空港>アセス準備書縦覧を 5 カ所で開始



宇井純先生の沖縄での研究の成果が、一冊の本になりました。

「沖縄型・回分式酸化溝のすすめ」

(自然循環型の畜舎排水処理システム)

16 年間の沖縄生活を終えられて、昨年本土にお戻りになった宇井先生が、沖縄で研究されてきた家畜排泄物の処理方法についての冊子が完成しました。名付けて「沖縄型・回分式酸化溝のすすめ」。管理が簡単でコストも安い、畜産農家のための安価な排水処理システムの作り方がわかりやすく解説されています。前半は、回分式酸化溝の原理と特徴、そして作り方が説明され、後半では沖縄や日本が抱える水問題、ひいては沖縄の未来について宇井先生が熱く語られています。

畜産農家はもとより、環境問題を考える上で、一般の方にも示唆に富んだ内容となっています。畜産農家の方には無料で配布していますが、一般の方にも一冊 500 円で販売しています。お問合せ・お申し込みは沖縄環境ネットワーク事務局まで、お電話・ファクス・Eメール等にてご連絡下さい。



環境情報おきなわ(2004 年 5 月～2003 年 6 月)

◆沖縄大学地域研究所創立 15 周年記念

連続シンポジウム

【第 7 回】

テーマ：「記憶すること記録すること」

発言者：加藤彰彦（沖縄大学・社会臨床学）

岡本恵徳（琉球大学名誉教授・沖縄文学）

香月洋一郎（神奈川大学日本常民文化研究所・民俗学）

重信幸彦（北九州市立大学・民俗学）

コーディネーター

家中茂（地域研究所専任所員）

日時：6 月 19 日（土）13：00～

場所：沖縄大学 3 号館 101 教室

【問合先】：沖縄大学地域研究所

TEL 098-832-5599

◆宮城晴子画集

名護市の東海岸の嘉陽で豊かな沖縄の自然と人情の中で暮らす画家の宮城晴子さんが、辺野古の海の美しさを画集にしました。いつまでも大事にしたい自然を、その素朴な筆致で鮮やかな陰影の中に再現しています。

画集を見た山口洋子さんが、手軽な絵葉書にして是非多くの人に見てもらいたいと思い立ち、併せて自然保護の運動基金として宮城さんの了解のもと、沖縄の美シリーズ①宮城晴子作品集海の詩②宮城晴子作品集ふるさとの詩として出版致しました。是非御購入下さい。

◎ 宮城晴子画集「海の詩」（3500 円＋税）

問合せ／名護市嘉陽 28 番地 宮城晴子

◎ 宮城晴子作品集 「海の詩」（500 円）

「ふるさとの詩」（500 円）

問合せ／宜野湾市宜野湾 3-11-26

電話（098）893-0175 山口洋子

◆新編「消えゆく沖縄の山・海・川」

1996 年に発刊され好評を博した「消えゆく沖縄の山・海・川」の新編がこのほど出版されました。前回から後の公害・環境問題年表も補足されており、今の状況が分かりやすく整理されています。定価 1500 円。沖縄環境ネットワーク事務局からも郵送します。

【問合先】：沖縄学版

TEL 098-854-1620

【書籍販売】 郵送します

◎『沖縄の環境と平和』 価格 1,000 円

◎『低周波音公害調査』報告書 1 部 500 円

◎『沖縄から世界へ』 価格 1,000 円

事務局（098-832-8484）までお問合せ下さい

◆沖縄環境ネットワーク世話人会 参加自由です！

日 時：不定（お問合せ下さい）

場 所：沖縄環境ネットワーク事務所

年会費：個人会員：3,000 円 学生会員：1,500 円

家族会員：3,000 円 団体会員：10,000 円

特別賛助会員：100,000 円

郵便振込先：（口座番号）02010-9-20132

（加入者名）沖縄環境ネットワーク



◇今年度総会のお知らせ◇

2004 年度沖縄環境ネットワーク総会を 6 月 26 日（土）に沖縄大学にて開催の予定です。詳細は次号にてご案内いたします。



■編集後記■

イラク戦争はますます泥沼にはまり込もうとしています。力づくの政策を改めようとしないアメリカと、それに追従する日本。反発を強めるイラクの市民。そんな状況の中での民間人拉致事件。同じ仕事に従事する者として他人事ではない事件でした。確かにイラクの現状は危険です。しかしもっと危険なのは、実はこの日本の現状なのではないか。帰国した被害者に向けた中傷の数々を耳にして、一番おかしくなっているのはこの国ではないかと思うことしきりです。そんな意味でも今回のコスタリカ特集は、自分たちの寄って立つ位置を再確認させてくれる、そんな意味もあったように思えます。（哲）

沖縄環境ネットワーク通信・第 25 号

2004 年 4 月 30 日発行

発 行 〒902-0075 那覇市市場 512 番地

ワタリアパート 106 号

沖縄環境ネットワーク

TEL/FAX 098-832-8484

E-mail/netwind@atlas.plala.or.jp

発行人 桜井 国俊 編集 酒井 哲哉

<http://homepage1.nifty.com/okikan/>